

ブロニスワフ・ピウスツキの没後百年記念イベント

井上 絃一

今年はピウスツキが1918年にパリで客死してちょうど100年になります。命日の5月17日にはフランスのパリとモンモランシー、ポーランド南西部の都市ジョルイで追悼行事が催され、北海道・白老の旧アイヌ民族博物館でも、境内に立つピウスツキのブロンズ胸像へ向けて古式輪舞がしめやかに奉納され、その前後には《チセ》内の炉辺で《カムイノミ》が厳粛に挙行されました。

同館は本年3月に閉鎖され、2020年の国立アイヌ民族博物館としての再開を期して解体整地工事が本格化、勢い百年忌もささやかな催しとなり、参列者は在京ポーランド大使館のオスミツキ領事と藁谷領事部職員、北海道ポーランド文化協会からは安藤会長と新井・井上両会員の計5名でした。直前の申し入れにもかかわらず百年忌の実施を快諾して頂いた野本前館長には、この場をお借りして深謝申し上げますとともに、今後とも節目の折にはピウスツキの事績が想起されるよう祈念してやみません。

7月29日には北大学術交流会館で、同大学スラブ・ユーラシア研究センター、本協会、ポーランド広報文化センター主催、駐日ポーランド大使館後援のピウスツキ没後百年記念「講演と映画と朗読の集い～ポーランド、サハリン、北海道～」が開催されました(以下の講演要旨と、北海道大学総合博物館ボランティアニュース No.50:2018.9 所載安藤報告を参照)。1985年の第1回ピウスツキ国際シンポジウム、2013年の白老での胸像除幕をめぐる記念セミナーの会場

でもあった同会館に、5時間という長丁場にもかかわらず、150名近くの聴衆が参集される盛会でした。

11月11日には再生ポーランド共和国が百歳を迎え、2019年は日本とポーランドの国交樹立百周年に当たります。ポーランドではブロニスワフ・ピウスツキを日波文化交流の魁(さきがけ)として称揚する機運が高まっています。ジョルイでは特別展「アイヌの世界～ブロニスワフ・ピウスツキから萱野茂まで」が開催中で、5月22日にはポーランドで初の記念碑が除幕されました(本号 pp.10-11 尾形記事参照)。10月18～20日には古都クラクフとジョルイで第4回ピウスツキ国際シンポジウムが予定されています。

1979年春の札幌で呱呱の声を上げたICRAP(ピウスツキ業績復元評価国際委員会)は、どうやらその命脈を永らえているようです。願わくは、この松明が未永く燃えつづけますように…。 (いのうえ・こういち)



白老・追悼式で(2018.5.17, 野本正博氏提供)

〈第85回例会、北海道大学学術交流会館、2018.7.29〉

講演と映画と朗読の集い～ポーランド、サハリン、北海道～(講演要旨)

ピウスツキの生涯と仕事

井上 絃一

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866～1918)はリトワニア生まれの優れた人類学者です。今年パリで客死してからまさに百年が経過、命日の5月17日にはパリとモンモランシー(フランス)、ジョルイ(ポーランド)、白老で追悼行事が挙行されました。本日のイベントも没後百年を記念するものです。

ピウスツキの生涯は、幼少年時代のリトワニア期(1866～86)、ペテルブルグ期(86～87)、流謫先の樺太島北部で過ごしたサハリン前期(87～99)、浦塩期(1899～1902)、研究者として実地踏査に従事したサハリン後期(1902～05)、日本経由で帰還して

以降の欧州期(06～18)の6時期に区分されます。

今回は時間の都合で、ピウスツキの画像を手引きとして各時期を大掴みに解説するに留めます。詳細については、末尾の資料を御参照ください。

ピウスツキはサハリン前期にニヴフ、後期にはアイヌ(エンチュ)、ウイлтаのフィールドワークに従事し、辛うじて保持されてきた彼らの言語や伝統文化を鋭敏な耳とあたたかい心で、エディソン式蠟管蓄音機やカメラなどの近代機器も駆使して記録、希有な学術遺産を残しました。彼の仕事はアイヌ学・ニヴフ学・ツングース学の草分けとして高く評価されています。欧州期にはリトワニア人やタトラ山地民の民俗研究で、また博物館学でも先駆的業績を残し、日本とポーランドの文化交流においても魁の

一人として活躍しました。

北海道大学医学部は、ピウスツキの妻チュフサンマの叔父に当たる「樺太酋長バフンケ」(日本名: 木村愛吉)の頭蓋骨を収蔵しています。児玉作左衛門医学部教授らが1936年8月、樺太東海岸の相浜で墓地を暴いて入手したものです。同大学は本年7月21日、遺族(ピウスツキとチュフサンマの孫・木村和保氏)からの請求に応じて遺骨の返還を決定した旨、木村氏へ通達しました。最後に、この問題にも言及するつもりです。

[参考資料]

高倉浩樹監修、井上絢一訳編・解説『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта～』、仙台、2018

井上絢一「ピウスツキのサハリン研究とバフンケの髑髏(されこうべ)」(電子版) <http://hokkaido-poland.com/events/PilsudskiInoue20180225.pdf>
井上絢一「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」改訂版(電子版) <http://hokkaido-poland.com/events/ChronologicalRecord201807.pdf>

ピウスツキが収集したアイヌ衣文化

佐々木 史郎

ここでは、当企画のチラシやポスターにも使われているピウスツキの油彩肖像画(1912、クラクフ、アドマス・ヴァルナス作、スレユーヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館蔵)でピウスツキが着用している着物に着目し、それがどのような着物(素材、作り方)で、どの地方のものかを明らかにします。



B・ピウスツキはアイヌに関する論考と写真と音声資料を数多く残しましたが、それと同時に実物資料も少なからず収集しています。その主たる部分は現在ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー人類学民族学博物館(通称クンストカメラ)に収蔵されていますが、そのほかにも同市のロシア民族学博物館、ウラジオストクの沿海地方総合博物館、ユージノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館、さらにはドイツ・ライプツィヒの民族学博物館、オーストリア・ウィーンの世界文化博物館などにも収蔵されています。

この肖像画でピウスツキが着用しているのは、その布地の色合いと文様から、サハリンのアイヌに特徴的な衣服である「テタラペ」の可能性が高いのです。テタラペとは「白いもの」という意味で、その主要な素材であるイラクサ繊維の布が白く輝くことからそのように呼ばれたといわれます。サハリンでは、北海道のアイヌが多用したオヒョウ、シナノキなどの長い繊維が取れる樹木が少なかったためか、イラク

サから繊維を取ることが多く、テタラペはサハリンに特徴的な衣服です。

ピウスツキが着用しているテタラペでは、衿周りと肩から背中にかけて、そして袖口に独特の文様が見られます。その描かれ方から、まず幅の広い藍木綿を縫い付け、その上に赤い綿織物もしくは毛織物の布を切って伏せ、その縁と中程に色糸の刺繍を施して留めていると判断できます。赤い布の上に少し間延びしたハート型の模様が見えます。

この種のテタラペはヨーロッパ、ロシア、日本の博物館に何点か収蔵されています。最も似たものはロシア民族学博物館が所蔵する、V・P・ヴァシーリエフがサハリン東海岸のアイ・コタン(後の栄浜村相浜)で1912年に収集したもの(下図)です。そこはピウスツキが1904年まで妻子とともに暮らしていたコタン(村)です。この肖像画でピウスツキが着ているテタラペは、彼の妻チュフサンマが愛情を込めて縫製した逸品だったのかもしれませんが。

(ささき・しろう、国立民族学博物館名誉教授)



V・P・ヴァシーリエフが収集したテタラペ(荻原真子、古原敏弘、V・V・ゴルバチョーヴァ編『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館、2007、149頁より)

ピウスツキが日本に残したイメージ

～明治から現在まで～

新井 藤子

存命中から死後に至るまで、プロニスワフ・ピウスツキには実に多面的な人物像の記録が存在します。本協会においても、この2、3年に、新生ポーランド共和国初代国家首席のユゼフの兄として、世界有数の人類学者・アイヌ民族研究者として、それでありながら、今となってはワルシャワの雑踏の中で思い出されることもない傍流人物として語られ、かたや顕彰事業の中では、ロシア、ドイツ、リトアニアなど多岐にわたるナショナリティを想起させる地球人の魁として、さらには樺太アイヌ女性との悲恋をともなう婚姻を経験した碧眼の美丈夫として、多くの視点から様々な形のピウスツキの人物像が描かれ、あるいは史実とされる事柄が伝えられています。

もともとピウスツキには、二葉亭四迷が評した「あ

どけない真面目な態度」や、横山源之助による「学者的態度を以て研究するばかりでなく、正義博愛の観念強く」という記述にもみられるように、彼に関与するあらゆる人々をして、積極的に「～な人」と語らしめずにいられなくさせる魅力があったようです。これは彼の心優しい気質や教養あふれる振る舞いによるものであるのはもちろん、波乱や移動変転に満ちた生涯の行程のなせるものともいえます。

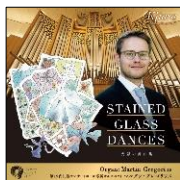
また、多くの歴史的記述や言説に触れていると、彼は無意識のうちに関わる人々の精神を鼓舞し、

生を前進させ、現実的に社会的な実績へと昇華させる才にも長けていたことが窺い知れます。その一事例としては、欧州帰還後のピウスツキによるポーランド民族音楽調査研究が、ショパン没後のポーランドを代表する偉大な作曲家カロル・シマノフスキへ多大な影響を与えていたことが挙げられます。

ここでは、明治期から現在まで、また、生活、労働、恋愛、研究、人物交流等のジャンルから、主に日本の資料にのこされている、多様なピウスツキの人物像に触れます。 (あらい・ふじこ)



木村和保（プロニスワフの孫）、井上統一、佐々木史郎、新井藤子、朗読：長屋のり子、白井順、酒谷茂靖 (写真 尾形芳秀)



《新会員のひとこと》

Kitaraの仕事から
篠原 朗子

札幌コンサートホール **Kitara** には、日本で最大規模を誇るパイプオルガンが設置されています。オルガンの魅力を発信するために、**Kitara** には、ヨーロッパから若手演奏家を1年間の任期で専属オルガニストとして招聘する制度があり、これまでに19名が札幌へやってきました。マリア・マグダレナ・カチオルさん(第15代)、マルタン・グレゴリウスさん(第19代)の2名がポーランド出身です。

専属オルガニストは、**Kitara** 主催のコンサートのほか、小学校へのアウトリーチ、地元の音楽大学の学生向けの特別講義、他のホールや教会等でのコンサートへの出演など幅広い活動を行っています。

私は **Kitara** の主催事業の担当部署で働いています。カチオルさん、グレゴリウスさんのおかげでポーランドについて知るチャンスに恵まれ、この国が大好きになりました。特に心に残っているのは、カチオルさんから聞いたクリスマスのお話です。ガラス製のオーナメントで飾られたツリー、夜中に行われる教会のミサとクリスマス・キャロル…。家族で穏やかに過ごすポーランドのクリスマスの情景が目には浮かび、あたたかい気持ちになりました。

カチオルさん、グレゴリウスさんのコンサートでは、**Kitara** では演奏されなかったポーランドの作曲家によるオルガン作品を紹介してもらいました。私が特に

好きな曲は、美しい詩のようなメロディが印象的な、スジンスキの「悲歌」です。7月に発売されたばかりのグレゴリウスさんの CD (写真) に収録されている、現代作曲家サヴァの「踊る絵」もすてきな曲です。

残念ながら、私はポーランドに行ったことがないのですが、いつか訪れてみたいと思っています。グレゴリウスさんが幼い頃に運命的な出会いをしたという、グダンスクのオリーヴァ大聖堂のオルガンの音色を聴きに行きたいし、カチオルさんおすすめのバラのジャム入りパンチキも食べてみたい。ポーランドへの夢は広がるばかりです。 (しのはら・あきこ)

小林浩子と申します



はじめまして。このたび協会に入会させていただきました、小林浩子と申します。

音楽・映画鑑賞が趣味の私に、会員の友人より何度かお誘いがあり、時計台コンサート、アンジェイ・ワイドの映画会と参加させていただきました。

江別の「ども」での〈午後のポエジア〉では、会員の皆様とポーランド人の方々の交流に参加して、楽しい雰囲気、私もこの会のお仲間になりたいと思入会致しました。

実は、ヨーロッパの国々には旅行していながら、ポーランドには立ち寄ったことがありません。ポーランドについては、ショパンと、アウシュビッツのことくらいしか触れる機会がありませんでした。これからは、いろいろな知識を深めていきたいと楽しみにしております。どうぞよろしくお願ひします。 (こばやし・ひろこ)